

## 巻 頭 言

新型コロナウイルス感染症は、私たちに、私たちの生活に様々な課題を突きつけました。

社会的距離をとること、マスクの着用、「3密」を避けること等、感染の拡大を防ぐためにとられた手立ては、それまでの人と人とのコミュニケーションにおいて当たり前だったことに大きな影を落としました。触れたり、表情を確かめたり、仲間で話し合ったりすることを制限され、外出さえもはばかれた時期もありました。今、ウイルスへの対応が明らかになりつつある中で、私たちは制限の範囲を狭めたり広げたりしながら、何とかこの閉塞感から抜け出そうとしています。

私たちがウイルスに突きつけられた課題を一つ一つ解決していく中で、見えてきたことがあります。その中に、日常のありがたさ、心豊かにあることのすばらしさ、そして身近な人とのつながりの大切さがあります。

「親子読書運動」は、昭和34年に当時県立図書館長だった椋鳩十氏が、「母と子の20分間読書」として試行し、それを受けて、昭和35年から県が「親子20分読書運動」として推進して今日に至っています。読書によって親子の絆<sup>きずな</sup>をつなぐことがこの運動の一つの目的です。この運動は各地域に根ざし、脈々とその目的を継承する取組がなされてきました。日々の家庭生活の中に読書を取り入れ、親と子が読書によって絆を深めることの大切さが、このコロナ禍によって再認識されているようです。

今年度の県内の読書グループの結成や活動に関する状況を見ても、グループ数や会員数に大きな変化がないことが分かりました。しかし、園児を対象とした読み聞かせグループは、小・中学生を対象とするグループに比べ、イベントの中止など活動の制限が大きかったようです。子供たちが肩を寄せ合い、表情を確かめながら読み聞かせを聞くということは困難になってしまいましたが、それぞれの工夫ある取組によって、子供たちに読書の楽しさを届けてくださっていることを頼もしく、また、ありがたく思います。

本誌「さざなみ」は、親子読書に関わるみなさんのために参考となる研修会の情報や子ども読書推進のための様々な取組、本県の読書推進活動の状況などをまとめ、県立図書館ホームページ上にも公開し、多くの方に御活用いただいております。今年度は、親子読書研修会、読書活動推進スキルアップ研修会が中止となりましたが、子ども読書活動推進のための様々な取組に関して、多くの個人・団体から寄稿いただきました。御多用な中に御寄稿くださった皆様に心よりお礼を申し上げます。

今後も「親子20分読書運動」の理念を大切に、親と子の、あるいは子供同士のあたたかな交流を通して、豊かな読書の世界を子供たちの中に広げていただければと考えます。